

タイトル：2023 年度 研究セミナー（第 24 回）

日時：2023 年 12 月 23 日（土）～24 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「私の博士論文」

後藤絵美（AA 研）

本報告は、2011 年 3 月に、東京大学大学院総合文化研究科に提出した「「神のために」まとうヴェール——現代エジプトのムハッジバ増加現象と宗教言説の浸透」の執筆過程に関するものであった。同論文は序、全 5 章、結語という構成だが、提出までに約 9 年間がかかった。時間を要した主な理由として、2 年間の留学とその途中でのテーマの変更、出産と育児、さらに内容上の躓きという三点を挙げた。

当初、報告者は、20 世紀はじめのエジプトで、ムスリム女性らがヴェールを脱ぎ始める過程に関心を持ち、それを研究テーマとしようと考えていた。2003 年 9 月から 2 年間、資料収集のためにエジプトに滞在する機会を得たものの、資料となる 20 世紀初頭の雑誌や文献が、図書館や古本市場を探しても一向に見つからなかった。途方に暮れていたところ、滞在中のエジプトでは、新たに自発的にヴェールをまとい始める女性が増えているということに気がついた。さらに周囲を見渡すと、ヴェールにまつわる書籍や新聞・雑誌記事、冊子、説教を録音したカセットテープ、テレビ番組などが、人々の生活空間にあふれていた。私はこの新しい現象を博士論文のテーマとして再設定し、関連資料を可能なかぎり網羅的に集め、目を通し、後に博論の各章となる論文の執筆に励んだ。

第一子が産まれたのは、4 つ目の論文を雑誌に投稿した後のことであった。この頃、それまで比較的順調だった「筆の進み具合」が鈍った。生活環境の変化が影響したことは間違いないが、原因はそれだけではなかった。博論が終盤に近づくにつれ、手元にある資料と博論全体の「問い」がかみ合わないことが明らかになったのである。

博論の第 1 章となる論文では、ヴェールに関連するとされるクルアーンの章句の解釈（タフスィール）を扱い、第 2 章では、ヴェールをめぐる現代の誌上論争を扱った。第 3、第 4 章では、ヴェール着用を推奨する内容の小冊子や説教の録音を検討した。出産後に新たに書き始めた第 5 章では、「改悛」してヴェールをまとったと語る芸能人女性らの言葉として出回っているものを参照した。それらを扱いながら、私は「女性たちはなぜヴェールをまとい始めたのか」という問いの答えを探していた。しかし、（後に分かったのであるが）資料から言えることは、「女性たちはどのような言説・思想状況の中でヴェールをまとい始めたのか」であり、そのことに気づき、軌道修正するまでに長い時間がかかってしまったのだ。

あらためて、これから博論を書き、仕上げていく方々には、以下の 2 点を伝えたいと思った。一つは入手可能な資料が十分にあるテーマを選び、かつ、資料の収集は徹底的に行うことが重要だという点である。とくに後者は、このテーマならば自分は他の誰よりも知っている

るという自信につながる。二つ目は、論文全体の問いの答えがうまく見つからない場合、問い自体が適切ではない可能性があるという点である。

報告に対する質疑では、ワーク・ライフ・バランスのことが話題になった。とくに、出産をどうするか、理想的なタイミングはあるのかという点は、若い世代の研究者にとって、性別にかかわらず関心のあるところかもしれない。私が出産や育児をしながら博論を仕上げられたのは、周囲の支援はもちろん、私以前に公的・私的支援の必要性について声をあげたり、制度づくりにたずさわったりした方々がいたおかげである。今回のセミナーは、今後の世代のよりよい環境づくりのために、何が必要で、何ができるのかを考える機会にもなった。